

今日でこそ「ラッカーウェア」と表現しないと欧米人には通じませんが、かつて **japan** という英小文字は**漆（漆器）**を意味していました。（ちなみに、「**china**」は陶磁器のことです。）

ヨーロッパに漆器を広めてくれたのは、外国人宣教師や東インド会社などの貿易商人たちです。17～18世紀のヨーロッパでは、漆器は「ジャパン」と呼ばれており、それに似せた装飾を施したヨーロッパ家具などは、「ジャパニング」という名称で人気を博していたほどです。

明治期には貴重な輸出品となります。岩倉使節団を歓迎した英国マンチェスター市長・ブースは「日本の漆器は比類無いほど仕上がりが美しく、巧緻であり、日本の絹は豪華絢爛であり、日本の磁器は繊細である」と述べています。漆の黒と金箔で装飾された**蒔絵**などは羨望の的でした。

後に喫煙具メーカーのダンヒル社が、パイプやライターに蒔絵装飾を施して、一世を風靡したことは有名です。この時の技術供与は日本の万年筆メーカーによるもので、現在の**（株）パイロット**、当時の社名は**並木製作所**でした。万年筆の軸に漆塗りを施す技術を持っていたのです。

「漆黒」という言葉があるように、黒色でありながら艶やかな光沢を持つのが漆の特徴です。漆の樹の幹を掻き削ると樹液が滲み出ますが、この時は透明な色をしています。この後、適度な温度と湿度のもとに置かれますと、樹液は硬化反応を起こして、黒く固まってゆきます。

漆は本当に不思議な性質を持ち、それが漆を扱う妙味なのですが、整理すると下記の通りです。

漆の成分・・・**漆酸（ウルシオール）**と夾雑物（水分、ゴム質、含窒素物など）。

なお、ゴム質には**ラッカーゼ**という酵素が含まれている。

漆が乾く・・・漆が多量の酸素を吸入して、ラッカーゼの働きによって酸化作用を行い、液体から固体に変化し、硬化すること。**水分蒸発で乾くのではなく、固まる。**

適度適温・・・酵素が活性化するのは、**温度が摂氏 20～25 度**で**湿度は 70～80%**。

なお、温度が 80 度を超えると再び活性化する。

漆の耐性・・・熱・水分・酸・アルカリに強く、絶縁性もある。堅牢で何年も変質しない。

漆かぶれ・・・完全に乾く前にウルシオールを発散するが、これに触れると皮膚炎を起こす。完全に乾けば全く心配は無い。また、慣れるに従い、免疫ができる。

よく「漆器はぬるま湯で洗い、柔らかな布で丁寧に拭かねばならない」と言われますが、本来漆は洗剤で変質するものではありませんし、熱湯でも冷水でも大丈夫です。ただ、丁寧に扱うにこしたことはありません。大敵は細い引っかき傷です。漆自体に変質はありませんが、美しさを損なうばかりか、それが原因で剥がれ落ちてしまう惧れがあります。その他、匂いを嗅ぐだけかぶれてしまうという話は、完全に乾いていないがために生じるもので、製作工程が杜撰であるといえます。必要な時間と工程をかけた漆製品であれば、これらの心配は無用です。

ある笑い話を聞きましたが、石川県輪島市での出来事だそうです。

市内にキャバレーがオープンして、粒よりの女性陣が評判となり、多いに流行りました。ところが、2ヵ月近く経ったある日、突然に店終いをしてしまったのです。

原因は「漆」でした。女性陣が全員、漆かぶれに悲鳴を上げてしまったというわけです。

店に通うお客の中には漆器職人が多く、身体のあちこちを触れられてしまったのですね。

免疫ができるまで我慢するというわけにもいかず、漆器産地ならではの、因果な事件でした。

**漆（漆器）は日本国産？**

1975年、福井県三方五湖に近い鳥浜遺跡から漆を塗った櫛、盆、土器などが出土しました。今から6500年前と推定されましたが、その2年後、隣国中国の揚子江河口近くの<sup>かぼと</sup>河姆渡遺跡で、それより古い7000年前の漆器が出土したのです。漆（器）はやはり中国原産と思われました。しかし、青森県三内丸山遺跡などの発掘以降、最新の分析技術（炭素14年代測定、DNA鑑定）によって、日本国産という別系統の可能性が発表されるに至りました。

成果は2点で、一つは年代が9000年前まで遡ること、もう一つが、中国産漆のDNA配列とは異なる、日本独自と思われる漆のDNAが見つかったことです。

その年代といえば縄文時代前期です。移動しながら狩猟・採集の生活をしていただけと教えられた時代ですが、実は全く違うものようです。野生の漆は樹液が少ないものですから、漆を多量に得ようとすれば栽培種に限られます。一定の場所に栽培する、これは移動生活を行うのであれば理にかないません。人々は集落を作り、集落の近くに漆を栽培し、そこで定住生活を送りながら、漆を利用した器や道具を作ったに違いありません。縄文の世界は優れて技術的なのです。

私の学窓に漆芸家があり、下に紹介したのは彼の詩集の一部なのですが、漆芸における巨匠や古代大和の絵師たち、さらには隣国中国の先人に想いを馳せているようです。さらにこうなると、縄文の人々へ連なろうと願うのではないのでしょうか。遥かな旅には違いありませんが、羨ましいような気もしますね。漆（漆器）を通して、古代（人）と対話できるのですから。

是真よ、光悦よ、光琳よ・・・はるか古代大和の絵師たちよ

そのまた遠く 西の国の ああ ずっと遠くの 人であろうとしたものたち

綿々と連なって ぼくの位置が視えてくる

京都で漆芸の家系として有名なのは、幸阿弥家（初代は道長）と五十嵐家（初代は信斎）です。中世（室町幕府）以降、厳しい時代もあったようですが、概ね時の幕府の庇護や宮中からの恩顧を受けて、優れた作品を残してきました。幸阿弥家10代の長重などは、『初音蒔絵婚礼調度』一式が秀逸で、徳川3代家光の娘・千姫が尾張徳川2代光友に嫁ぐ際の婚礼調度品を請け負いました。昼夜徹しての2年半、執念の賜かな。現在、名古屋の徳川美術館所蔵で、重要文化財指定です。

漆芸文化の頂点を極めたとなると、<sup>らでん</sup>螺鈿細工を挙げねばなりません。主に沖縄以南の夜光貝を用いるのですが、貝殻内側の虹色の皮膜を薄く剥がして張り付けるのです。沖縄は古くから琉球文化という独自の文化圏を誇っておりまして、確かに中国南部（それは漆の産地でもあり、漆器文化圏でもあります）の影響はあったでしょうね。宇治平等院阿弥陀堂のものが著名です。

漆の塗膜は、100回塗り重ねても厚さ3ミリという微妙さです。乾いて（固まって）は塗り、乾いては塗りを繰り返すのですが、細かな塵一つ付いても、そこだけ光沢が鈍るという繊細さ。さらには、金粉・銀粉を乾くまでの間に蒔き散らし、丹念に磨き上げます。ミクロン単位の熟練の技が必要とされます。何ものにもおかされない堅牢さと光沢は、このようにして出来あがるのです。縄文の人々は金銀や螺鈿こそ使用していませんが、漆の特性を見事に生かしています。

## 女性の髪の毛、ネズミの走り毛

漆器製作用の道具としては、特に塗り刷毛と線を描く筆が重要です。

前者の材料として最適なものが日本人女性の直毛黒髪。日本人男性や外国人女性と比べても癖が無く、しなやかで強く、且つ僅かで最適な油分を保持しています。近年はますます入手が困難になってきておりますし、食習慣の欧米化による影響も無視できないとのこと。

また、後者の材料で最適なものは、ネズミの背中に生えている細く長い「走り毛」と呼ばれるものです。昔は穀送船（米を運ぶ船）に棲みついたネズミがいましたので、米の陸揚げとともに、捕えたネズミが高値で引き取られました。米をかじられても十分お釣りがきたのです。むしろ、適度に米を食べたネズミの毛ほど、長くて腰の強い、最良の品質とのこと。

## 漆（漆器）の現状

漆液の生産も国内産と外国産（中国・韓国・東南アジア諸国）とがありますが、国内生産量は4トン程度で、需要量全体の5%にも満たず、外国産に席卷されているような状況です。

岩手県二戸郡浄法寺町が国内産の70%を占める主要産地ですが、樹液を掻き取る人も少なく、後継者も少ないという悩みを抱えています。他に茨城県大子町などでも悩みは同じです。

また、京都府天田郡夜久野町(近畿で唯一現存する産地)が、品質の高い丹波産漆の品種保存のため、従来は無理だとされていた、接ぎ木による増殖に成功しました。今後に期待できそうです。

さて国内産と外国産とを比べると、成分比率が微妙に違い、外国産はゴム質がやや多いです。それは即ち、乾く（固まる）＝安定する、のがそれだけ難しいということです。この点国内産はウルシオール含有率が高く、粘りが無くサラサラで、透明度が高く色も良く、乾きも早いというように、品質では理想的な優れものといえます。一方、価格面では国産漆は外国産の約2倍です。品質の良さは誰しも認めるところながら、コスト面では太刀打ちできないのが現状です。

## 漆(漆器)とは何か

漆は、詰まるところ「塗料」であり、「接着剤」です。縄文の人々も最初は獣を射止めるための道具を作ろうと、木と石片を接着させる目的から始まったようです。後には装飾を施した器なども作り、特別なものはハレの日（祭祀など）に利用されたと思われます。この風習が、現在でも正月用の三方とか、ハレの日の朱塗り器などに連綿と引き継がれているようです。

食をするということは、穀物の霊魂と人間の霊魂とが一体化することで、穀物の生命を体内に入れ、人間の生命を補強し、再生することです。あの「いただきます」という言葉は、穀物の命をいただくということであり、それゆえ、畏敬とともに感謝の念を表しているわけですね。

かつては、どこの家庭でも各自専用の膳があり、食器として漆塗りのお椀を使っていました。食は特別な意味を持っていたのであり、漆は、その大切な器に生命を吹き込んだわけです。

昨今では、漆器といえば高級な飾り物として、眺めるだけのものになってきたことが残念です。ただ、一部に自動車や電化製品（パソコン、携帯電話を含む）の塗装材料として、優れた質量感をもたせるべく、見直されてきてもいるようです。業界挙げて切磋琢磨を願いたいものです。